

(技術名) 与那国島のパヤオで漁獲したキハダ、メバチ、カツオの日中の食性							
(要約) 日中、 <u>パヤオ</u> で漁獲した小型の <u>マグロ類</u> と <u>カツオ</u> の胃内容物を調査したところ、出現した <u>餌生物</u> は浮遊性貝類、頭足類、浮遊性と浮遊幼生期の甲殻類及び魚類で、これらは主にマイクロネクトンと総称される生物群であった。							
沖縄県水産海洋研究センター 海洋資源・養殖班					連絡先	098-994-3593	
部会名	水産業	専門	資源生態	対象	マグロ	分類	研究
普及対象地域							

[背景・ねらい]

パヤオに滞留するマグロの索餌について、既往知見によると、パヤオは餌料環境が良くないため、パヤオに付いた生物に依存せず、パヤオを離れなければならないとされている。この事から、これまで実施したマグロの行動調査で得られたパヤオを時折離れる行動は索餌を反映したと考えられる。滞留行動特性をより理解する上で、マグロがどのような餌生物を利用しているのかを知る必要がある。そこで、パヤオで漁獲したマグロ、カツオの胃内容物を調査した。一般的に沖縄のパヤオでは撒き餌が使用され、胃内容物に多く含まれることが知られているが、与那国島のパヤオでは撒き餌を使用しない事から、適切な餌生物情報を得るための調査地として適当と考えられた。

[成果の内容・特徴]

- 2005年4月から2007年2月に与那国島海域のパヤオで漁獲されたキハダ、メバチ、カツオの胃内容物を調査した。調査期間中にキハダ424個体、メバチ49個体、カツオ301個体を得た。マグロとカツオは全て日中漁獲された。体長はキハダ29～68cm、メバチ38～60cm、カツオ25～75cmで、いずれも小型の個体であった。
- キハダ、メバチ、カツオの胃内容物から出現した餌生物は甲殻類、頭足類、魚類が多く、多様であった(図1)。胃内容物重量の体重比は平均で、キハダ0.55%、メバチ0.9%、カツオ0.53%で、空胃率(全個体数に対する空胃個体の割合)はキハダ41.7%、メバチ42.9%、カツオ59.8%であった。
- 餌生物の体長は3～245mmで、主にマイクロネクトンと総称される生物群であった。
- 音波送受信機を使用した行動調査の結果から、キハダ、メバチは日中、パヤオから遠く離れない事がわかっている。胃内容物から出現した餌生物はいずれもパヤオ周辺に浮遊・遊泳して来たものが、摂餌されたと考えられた。
- 出現した餌生物が多様であった一方、空胃が多かった事から、パヤオ周辺海域は餌生物環境があまり良くなく、マグロ類は分布するマイクロネクトンを選好して摂餌したと考えられた。

[成果の活用面・留意点]

キハダ、メバチは夕方から夜間、パヤオから比較的離れて行動する事がわかっており、この時間帯の活発な摂餌が予想される。日中得られた胃内容物はマグロが主に依存する餌生物でない可能性もあり、夜間の食性について、今後、調査する必要がある。

[具体的データ]

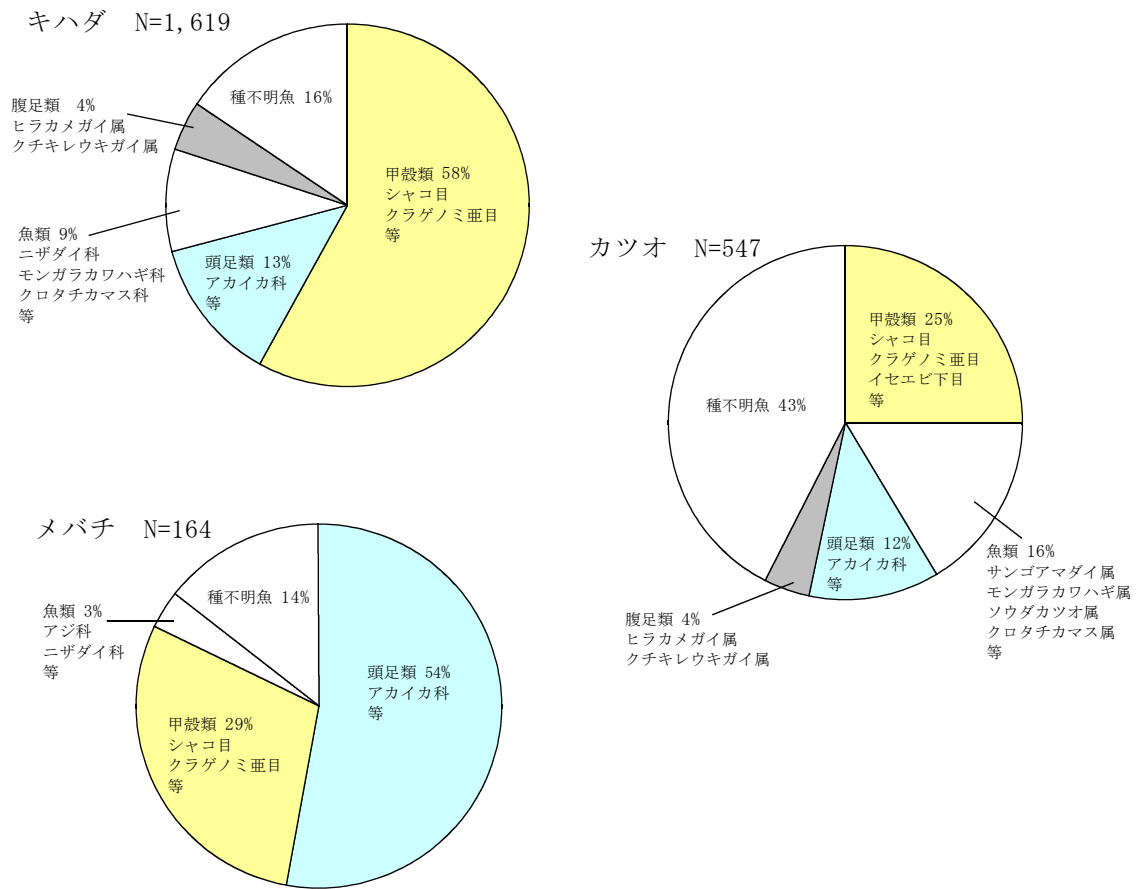


図1.マグロ、カツオの胃内容物組成(Nは餌生物の個体数)

[その他]

研究課題名：パヤオ周辺のマグロ類の餌料環境調査

予算区分：県単

研究期間：平成17年度～平成19年度

研究担当者：近藤忍

発表論文等：平成19年度沖縄県水産海洋研究センター事業報告書